

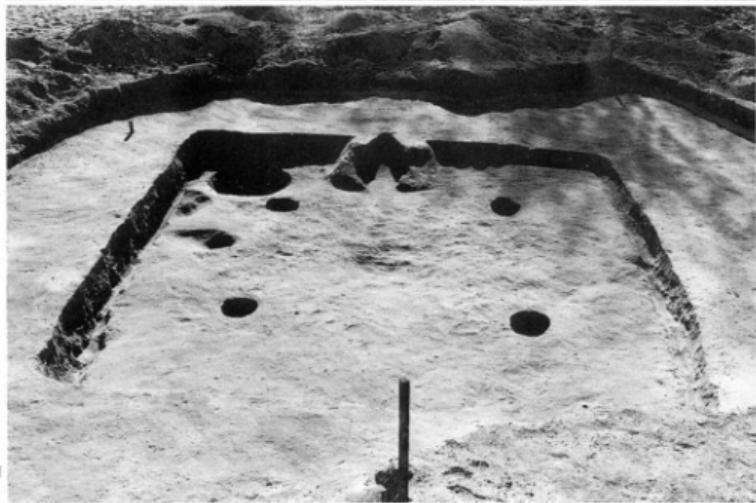
西 堀 遺 跡

1987

前橋市教育委員会



1. 西堀遺跡
全 景
(北から)

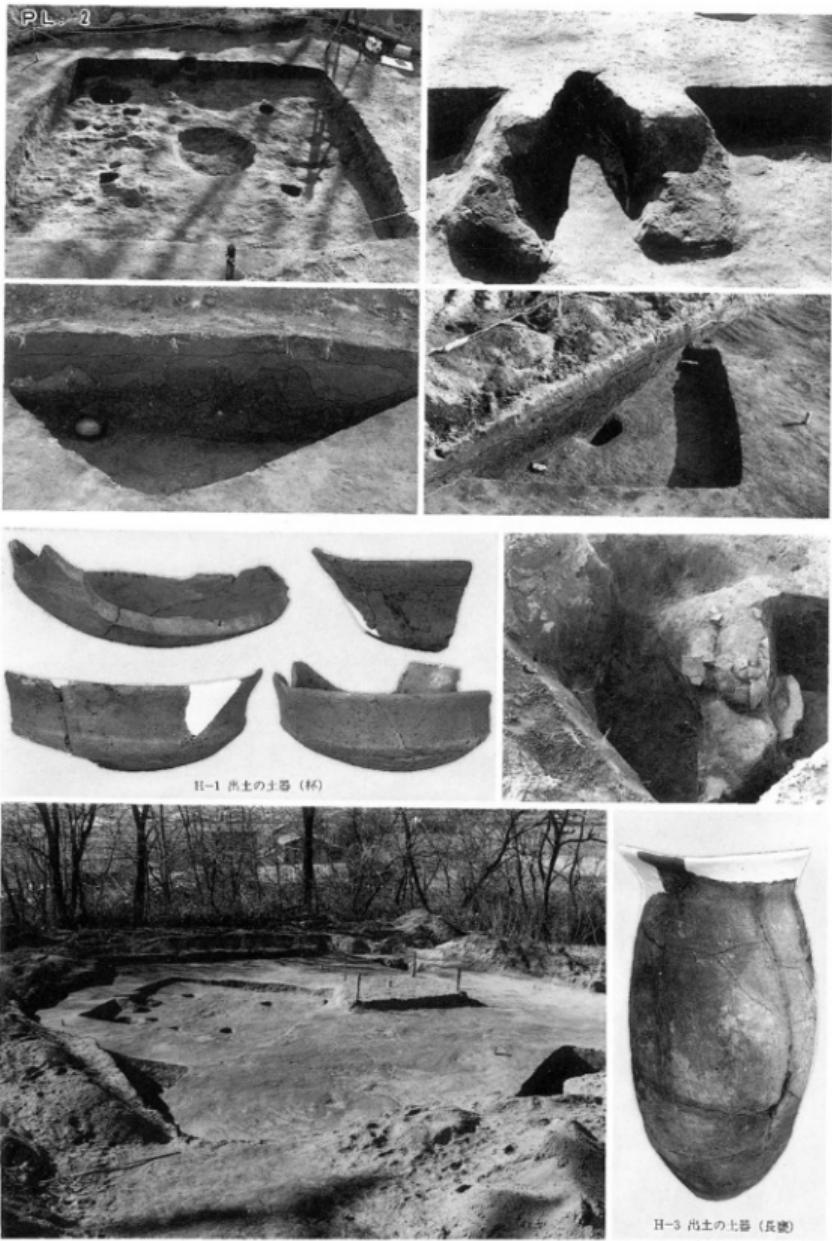


2. 日-1 全景
(北から)



3. 調査風景
(西から)
4. 通路遺跡
(南から)





H-1 出土の土器（杯）

H-3 出土の土器（長甕）

1. H-1 振り方（北から）。 2. H-1 瓢（北から）。
 3. H-2 金蓋（北から）、 4. H-3 金蓋（北から）。
 5. H-3 瓢（北東から）、 6. 西壁遺跡全景（東から）

序

前橋市の北にそびえる赤城山は、古くから人々に親しまれてきた名山であります。とりわけ、赤城山南麓は、その雄大な裾野に広がる台地を中心として、旧石器時代からひらけてきた地域で、いたるところでたくさんの遺跡が発見されてきています。なかでも、近年この地区で、工業及び住宅団地造成事業・土地改良事業等が行われたことにより、おびただしい数の遺構や遺物が発掘調査されました。

このたび、東京電力株式会社より前橋市教育委員会に、赤城山南麓・上細井町の送電線鉄塔建替工事に係る埋蔵文化財について協議の申し入れがありました。そこで、前橋市教育委員会で確認調査をしたところ遺跡地と判明しましたので、関係者協議・調整の結果、緊急発掘調査を実施することになりました。

調査の結果、古墳時代後期の竪穴住居址3軒と縄文時代の土坑1基を検出することができました。残念ながら、遺跡は、現状のままでの保存が無理なため、記録保存という形になりましたが、今後、地域の歴史・前橋市の歴史を解明する上で、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、物心両面に援助をいただきました東京電力株式会社・共和建設株式会社に、また寒風の中、直接調査に携わってくださった担当者・作業者のみなさんに厚くお礼申し上げます。

本報告書が、斯学の発展に少しでも寄与できれば幸いに存じます。

昭和 62 年 3 月 20 日

前橋市教育委員会
教育長 岡本信正

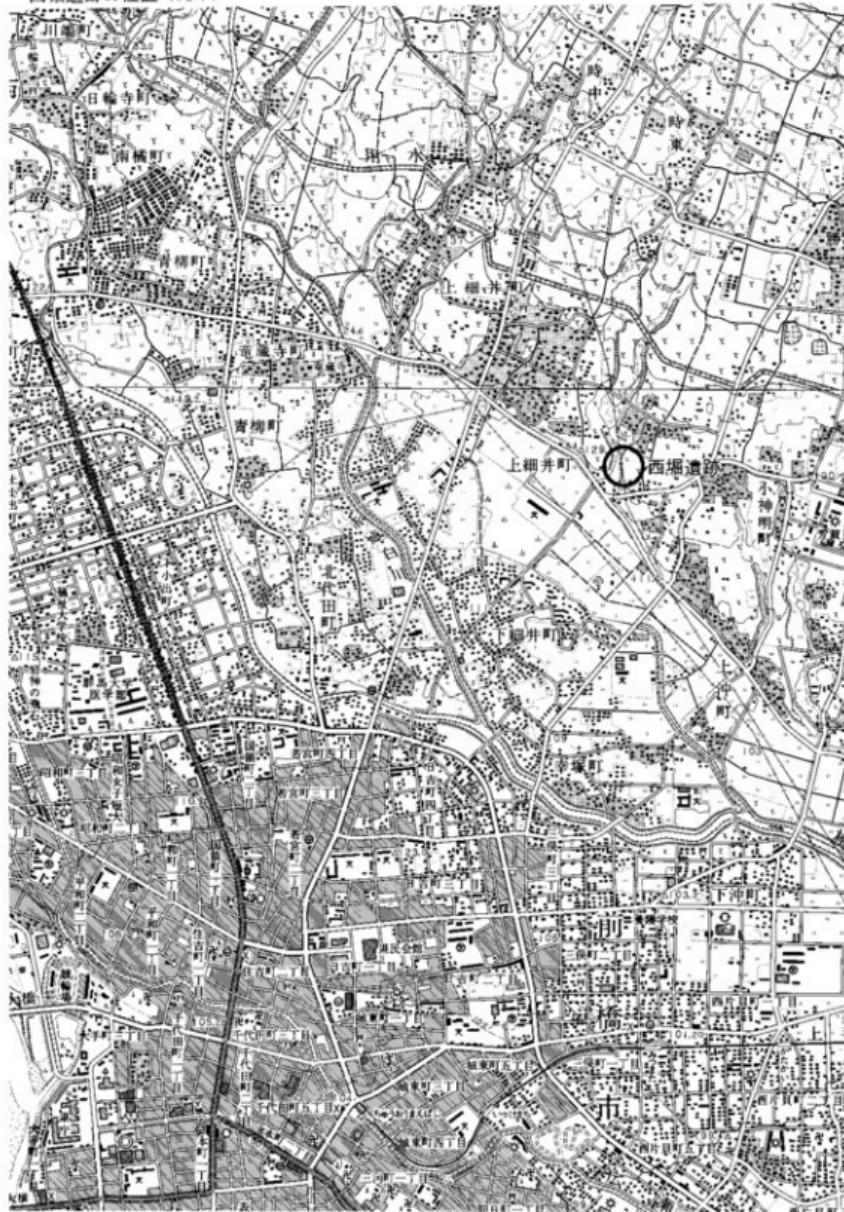
目 次

はじめに	頁
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	1
III 調査の経過	3
IV 層序	3
V 遺構と遺物	4
VI まとめ	10

例 言

1. この報告書は、東京電力株式会社（群馬県前橋市本町一丁目8-16）が建設する送電線鉄塔建替予定地（群馬県前橋市上細井町字西堀264）における発掘調査に関するものである。
2. 調査は、前橋市教育委員会社会教育課文化財保護係が担当し、高橋正男・前原 豊が参加した。また、調査にあたっては東京電力株式会社・共和建設株式会社に費用及び協力を得た。
3. 本書の作成は、高橋正男・前原 豊が共同討議の上、執筆・編集にあたった。
4. 本遺跡の略称は61B5である。
5. 遺構の略称は次の通りである。
H…住居址、D…土坑
6. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次の通りである。
遺構…全体図1/200、住居址…1/60、遺物…土器2/3、1/3、1/6
7. スクリーントーンの使用は次の通りである。
遺物実測図 内黒処理…斑、赤化…点、敲痕…網、繊維土器断面…点

西堀遺跡の位置（丸印）



1:25,000 前橋・渋川

A horizontal scale bar with numerical markings at 0, 500, 1,000, and 1,500.

I 調査に至る経緯

昭和61年11月18日付で本調査地の片品川送電線鉄塔建替工事に係る埋蔵文化財表面調査依頼が、開発事業者である東京電力株式会社群馬支店長・井出和彦氏より前橋市教育委員会に提出された。11月22日に前橋市教育委員会社会教育課で表面調査をした結果、本調査地は遺跡地である可能性が高いことが判明した。そのため、昭和62年1月12日に鉄塔建替の基礎工事に先立って遺跡確認調査を実施したところ、調査地より古墳時代の竪穴住居址3軒、縄文時代の土坑1基を確認した。そこで、前橋市教育委員会と東京電力株式会社及び共和建設株式会社で協議・調整をした結果、前橋市教育委員会直営で緊急発掘調査を実施することとなった。なお、本遺跡の名称は、耕地図による旧地籍の字名を採用し、^{西堀遺跡}とした。

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

西堀遺跡が所在する群馬県前橋市上細井町字西堀264番地は、市街地から北東へ4km離れた赤城山南麓に位置する。遺跡は、古利根川が形成した河岸段丘上にあり、遺跡の南150mを北西から南東に走る県道今井・前橋線によって広瀬川低地帯（古利根川氾濫原）と区別される。遺跡の北と東は、桑畑や畠地に利用されているが、西側は赤城火山斜面を南下する鎌倉川により比高差10mほどの崖になっている。一方南側は、民家の屋根越しに広瀬川低地帯にひろがる水田や市街地を一望の下に見渡すことができる。また、遺跡地の標高は約128mを測り、南100mのところには、通称鎌倉坂と呼ばれる急坂がある。

2 歴史的環境

本遺跡の立地する古利根川に面した河岸段丘上には、縄文～古墳時代を中心に遺跡が密集している。旧石器時代の調査例こそないが、小神明湯気遺跡や端氣着帳遺跡では、縄文時代草創期の尖頭器を出土している。前期以後、縄文遺跡の数は増加の一途をたどり、中後期では芳賀東部団地遺跡で数十軒の敷石住居も調査されている。ところが、晩期になると台地上から急激に遺跡が無くなる。おそらく、気候の変化が狩猟民を漁労にあらせたもので、古利根川低地帯の中洲や微高地に移住したものとも考えられる。晩期から弥生時代に至る遺跡は確認されていないが、低地帯の調査が少ないため偏僻な見方をしている可能性もある。再び、人々が段丘上に集落を構えるのは、弥生時代中期後半からで、それ以後は遺構の数が急増し、藤沢川流域を中心として広範囲に及んでいる。なかでも、鳥取・端氣・五代町からは磨製有孔石器の出土例がある。また、赤井戸式や樽式土器を出土する遺跡は多いが、これからの大半は古式土師器を伴うものと考えられる。上毛古墳綜覧では、上細井町に17基の古墳が確認されている。それらの中には、機織具の

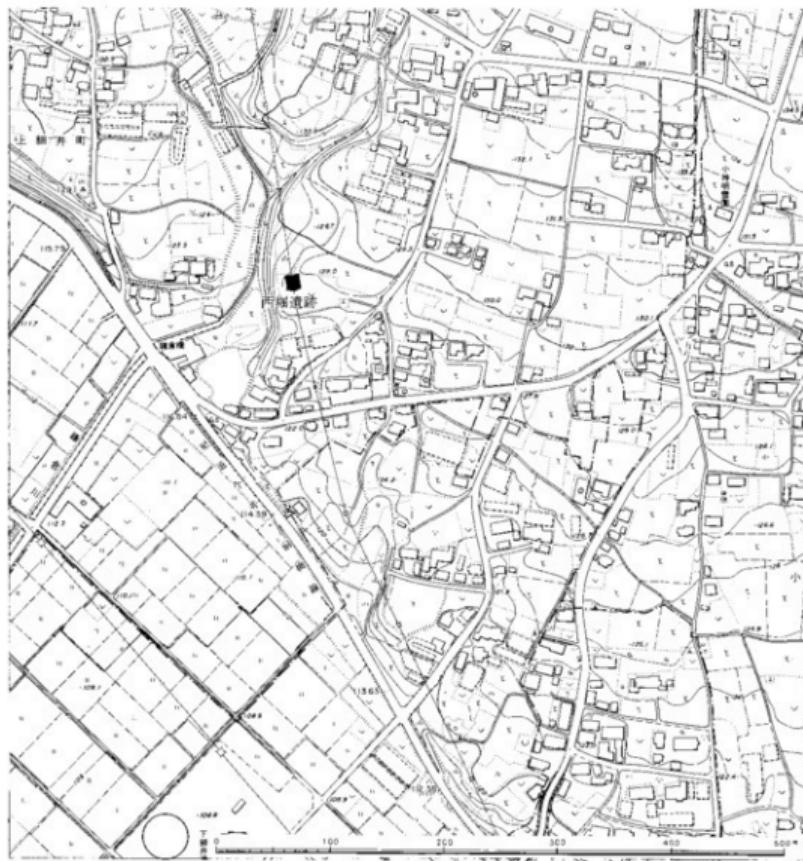


fig.2 西塚遺跡周辺図 (1/5,000)

石製模造品を出土した上細井幡荷山古墳や銅鏡を出土している西塚の古墳等初期段階のものも含まれている。昭和50年に調査された芳賀西部团地遺跡では、FA下の古墳群が調査されており、それに後続する小神明西田古墳群では、帆立貝式古墳を中心とした初期横穴式古墳が調査された。また、付近の小円墳からは、現在東京国立博物館に所蔵されている四獸鏡を出土している。集落址としては南田ノロ遺跡・小神明九料遺跡等でFA下の住居址を調査している。律令期の遺跡としては、和名抄の芳賀郷に推定されている芳賀東部团地遺跡があり、古代末までの大集落を形成している。中世では特定の地域や莊が御厨^{みくりや}と保^ほといった私有地となる。付近の細井御厨では、14世紀中葉、領主と地頭預所の間で年貢をめぐって争いが起こっている。*前橋市史Ⅰによる。

III 調査の経過

昭和62年1月12日（月）の遺跡確認調査後の開発事業者との協議・調整の結果、発掘調査は1月13日（火）～19日（月）の実質4・5日で行うことになった。調査期間は短かったが、好天に恵まれ、調査は順調に進み、多大な成果をあげることができた。

◎ 1月13日（火）（曇のち雪）

器材搬入。調査開始。プラン確認の結果、住居址3軒と土坑1基を検出。杭打ち作業。遺構掘り下げ開始。

◎ 1月14日（水）（晴）

遺構掘り下げ。図面作成。

◎ 1月16日（金）（晴）

遺構掘り下げ。図面作成。写真撮影。

◎ 1月17日（土）（晴・風強し）

遺構掘り下げ。図面作成。写真撮影。

◎ 1月19日（月）（晴）

遺構掘り下げ。図面作成。写真撮影。

調査終了。器材整理搬出。



fig.3 西堀遺跡発掘調査区域図 (1/1,500)

IV 層序

西堀遺跡の立地する赤城火山斜面では、ローム層の良好な堆積が見られ、今から21,000年前の旧石器時代より現在に至るまで、人々の生活の痕跡が連続と続いている。遺構は、地表から約40～50cm下の全体層序第IIa層上面で検出された。

I a層……現在の耕作土。

I b層……旧来からの耕作土。

II a層……浅間白糸バミス混土層。ソフトローム層。

II 層……ソフトローム層。

III 層……ハードローム層。黄褐色細砂。

IV 層……浅間褐色浮石層 (B P)。

V 層……黄灰色疊層。砂・礫のラミナ。

VI 層……明赤褐色砂層。砂のラミナ。

VII 層……水性堆積のローム層。灰白色。

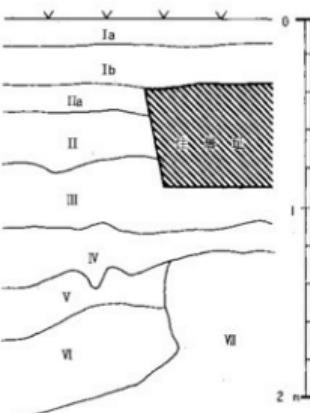


fig.4 西堀遺跡標準土層図 (1/30)

V 遺構と遺物

1 遺構

本遺跡では、全体層序II a層上面で、古墳時代後期の竪穴住居址3軒と縄文時代の土坑1基が検出された。以下、各遺構を概略的に見ていきたい。

H-1号住居址 本住居址は、C・D-2・3グリッドに位置し、遺存状態は良好だった。平面は、南北4.52m・東西4.44m・面積19.2m²を測り、主軸をN-156°-Wにとる整美な方形をしていた。確認面からの壁高は、東壁で最大28cm、南西隅で最小9cmを測り、平均21cmの深さである。周溝は、竪穴袖脇から壁下を全周している。周溝幅は、最大26cm、最小13cm、平均20cmで、深さは、浅い所で3cm、最も深い所で10cmを測る。断面形はU字形を呈する。覆土は、細砂層・軽石混じりの粗砂層で4層に細分できる。プラン確認の段階で、覆土と住居の切り込まれているローム層が鮮明に分かれており、確認は容易であった。床面は、厚さ15cm前後で貼床が施され、一部東壁近くに馬蹄形を呈する高まりが見られたが、ほぼ平坦に仕上げられていた。また、住居址中央から竪周辺にかけては、堅緻な床面が確認された。床面の掘り方は、東が浅く西が深いと

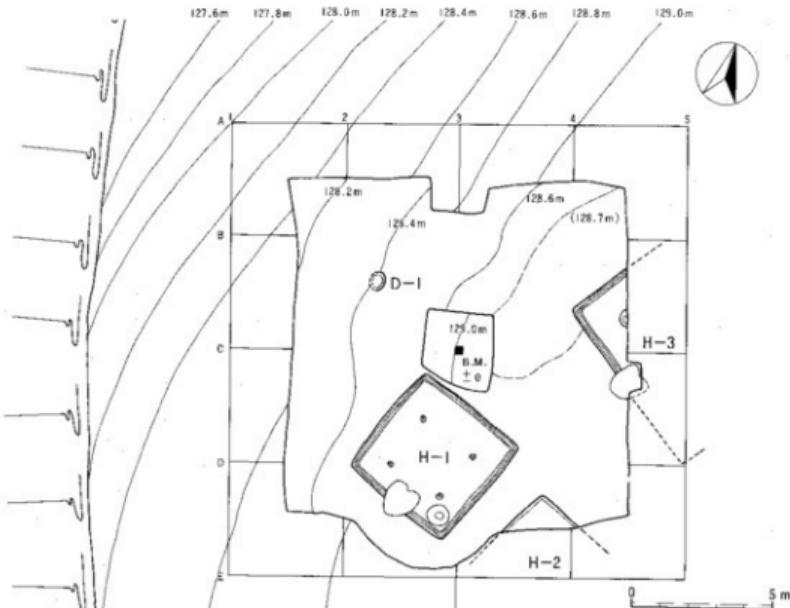


fig.5 西堀遺跡全体図 (1/200)

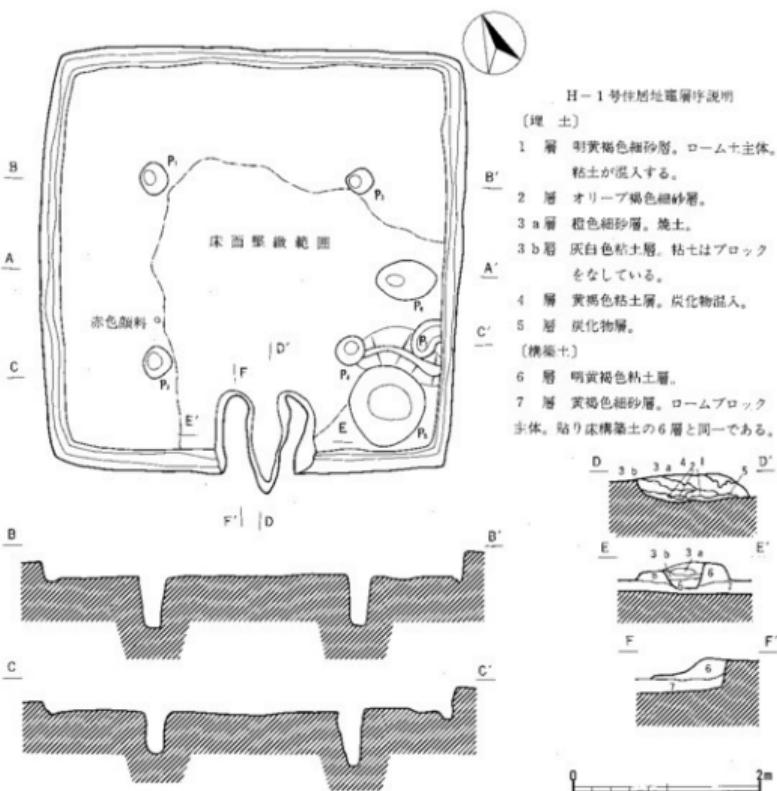


fig. 6 H-1号住居址 (1/60)

いう傾向が見られ、住居内中央には、長軸1.25m・短軸1.05m・深さ14cmの橢円形の粘土を貼った床下土坑が検出できた。柱穴は4個検出された。平面形は概ね、径30cm前後の円形で、深さは54~63cmであった。柱穴間距離は、北側のP₁~P₄が2.2m、南側のP₂~P₃が2.1m、東側のP₃~P₄が1.8m、西側のP₁~P₂が2mを測った。貯蔵穴P₅は、円形を呈し、径85×80cm、深さ65cmの規模であった。また、東壁近くのP₆は、入口の施設に伴うピットと考えられる。住居址からの出土遺物は、比較的少なかった。土器は、窓周辺から住居址南東側にかけて図上復元できえた土師器の杯が8点出土した。他の遺物としては、祭祀に使用されたと思われる土玉1個や赤色顔料が少量検出できた。窓は、南北中心に付設され、N-159°-Wの主軸を示す。全長1.09m、全幅1.12mを測り、壁外に20cm張り出し、煙道は約65度で立ち上がる。構築は、ローム層の上に貼り床構築土を敷き込み、その上に明黄褐色の粘土を貼りつけ積み重ねていく工法がとられていて

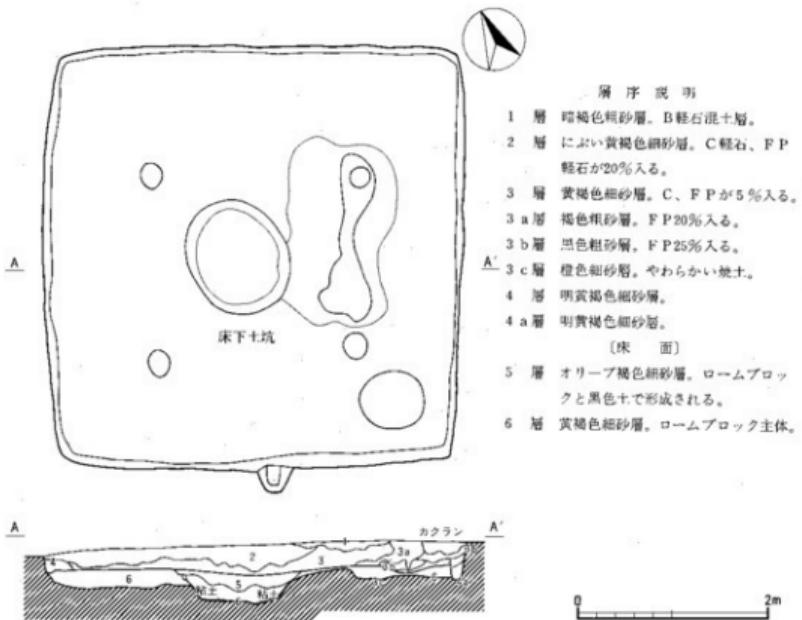


fig. 7 H-1号住居址掘り方 (1/60)

る。補強材としての遺物や礫等は検出されておらず、袖石や支脚も確認されなかった。焼土は、竈の底面近くに見られた。

H-2号住居址 本住居址は、調査区域の南端D-3グリッドに位置する。住居址の大部分が調査区域外で、北西部分だけの調査のため平面規模は不明であるが、主軸をN-155°-Wにとる方形をしていると考えられる。確認面からの壁高は、北壁で44cm・西壁で40cmを測る。覆土は、細砂層からなる2層に分かれており、周溝は確認できなかった。床面は、厚さ10cm前後の貼床が施され、平坦である。北壁近くの床面に径15cm程度の自然石が確認できたが、その外の出土遺物は少なく、土器片が20点ほど検出されただけであった。

H-3号住居址 本住居址は、調査区域の東端B-C-4グリッドに所在する。調査できたのは、住居址の南東部分と南壁に位置するカマド部分で、その外は調査区域外であった。規模は、H-1号住と同様に竈が南壁の中心に位置すると考えると、一辺が7m近くの方形をした大型の住居と考えられる。主軸はN-142°-Wを示す。確認面からの壁高は、西壁で約39cm、南壁で約33cmを測る。西・南壁で確認できた周溝は、幅が20cm前後、深さが8cm前後であった。覆土は軽石混じりの細砂層で5層から成っていた。床面は、厚さ10cm前後の貼床が施され、ほぼ平坦だった。

長軸70cm・短軸50cmの橢円形を呈する深さ60cmの柱穴が1個検出できた。他の住居址と同様出土遺物は少なく、実測できた遺物は、杯1点・長甕1点だけであった。竈は、南壁の中心に付設されていると考えられ、N-162°-Wの主軸をとる。竈の規模は、全長1.35m全幅1mと推定できる。竈の両袖から補強材として使われた抜石3点と長甕1点が検出できた。

D-1 土坑 B-2 グリッドに位置する。平面形は橢円形を呈し、長軸80cm・短軸60cm・深さ50cmを測る。出土遺物はなかったが、覆土から判断して縄文時代の土坑と考えられる。

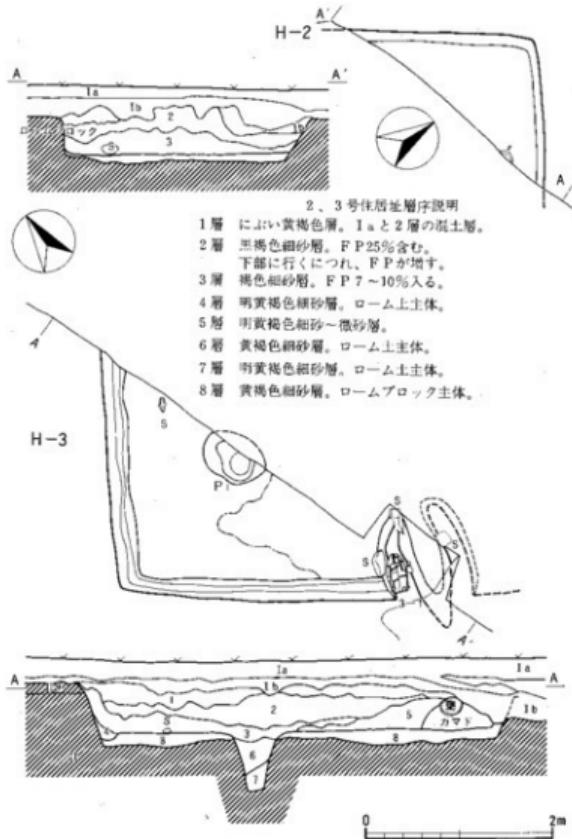


fig.8 H-2、3号住居址 (1/60)

2 遺 物

出土した遺物の総量は中ボリ2~3袋程度と少なかった。遺構毎にみるとH-1が中ボリ1袋ほどで、H-2は土器20数片、H-3が中ボリ袋半分で土坑からは全く遺物がみられなかった。このうち図示できたものは、H-1が土師器杯8個体、土玉、H-2がなく、H-3が長甕1個体、杯1点である。縄文時代の遺物は土器片が小ボリ1袋、石器類が中ボリ1袋出土した。縄文土器の大半は早期無文土器であった。この外に古墳時代前期石田川式土器が2片出土した。

縄文土器 (fig.9-1~12) 1~3は口辺部片である。3片とも沈線で文様構成され、3の沈線分歧点に刺突がみられる。2・3の内外二面には条痕が施されており、胎土に纖維の混入

がみられる。口縁断面は1が丸棒状であり、2・3が角頭状に仕上げられ、口唇外縁に等間隔の刻みが施されるという特徴を有する。1・2の沈線は幅広く浅いもので、3の沈線は深く狭いもので竹管を用いている。3片とも、にぶい赤褐色を呈し焼成も良好である。4・7～9は外面に擦痕がみられる無文土器である。9の外面には竹管による円形刺突が施されている。4・7・8には多量の砂粒が混入され、その中には結晶片岩粒がみられる。色調は7～9がにぶい黄色であり4が浅黄色を呈する。5、6は内外面とも条痕が施され纖維を混入している。焼成、胎土ともに良くにぶい赤褐色を呈する。10～12は単節斜行繩文（10・11がR L、12がL R）が施される。

石 器 (fig. 9-15～17, fig. 10-1-10) 刺片類の出土が多く、製品は4点出土しただけである。石材は大部分が黒色頁岩で、ハリ賀安山岩が數点、チャート2点、黒曜石1点である。^{註1} 15、16がスクレッパーであり、17が「片刃形の石器」である。3点とも黑色頁岩である。1-10は安山岩製の敲き石で一様に顕著な敲痕が認められた。

土師器 (fig. 9-13・14) 13が台付甕、14が甕の破片。いづれも石田川式土器である。

土 玉 (fig. 10-1-9) 直径、幅、長さとも1.1cmを測る。焼成前穿孔。赤黒色。

竈抽石 (fig. 10-3-3) H-3の竈右袖先端に用いられた面調整のある安山岩円礫。

赤色顔料 (fig. 6) H-1の住居床面直上から2cm四方の範囲で検出された。



fig. 9 西堀遺跡出土遺物 (1/3)

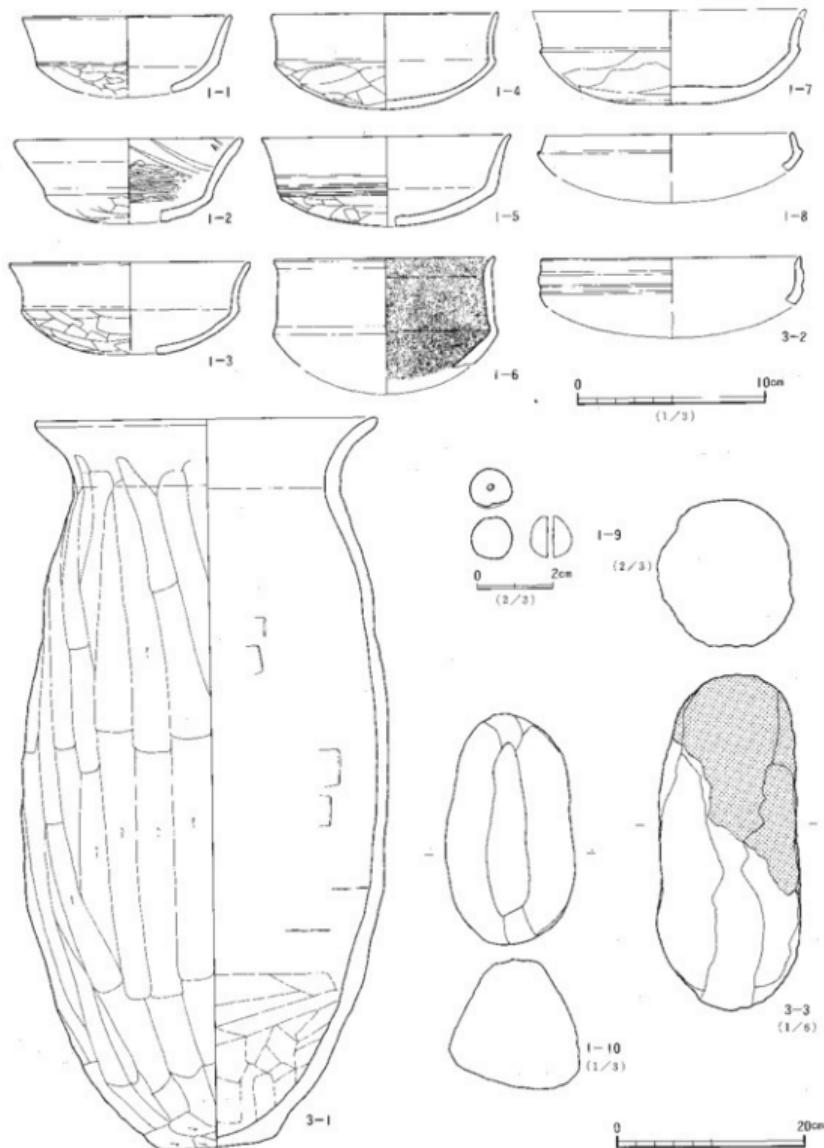


fig.10 西堦遺跡出土遺物 (1/3、2/3、1/6)

t a b . 1 西堀遺跡出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	法量 口径 器高	残存	胎土	色調	成・整形方法		備考
							口縁脚部	底部	
1-1	No. 6	杯	11.0 (4.3) ^{cm}	1/8	密。雲母	橙	外模。横撫	範削	
1-2	No. 4	杯	12.0 (4.5)	1/5	密	橙	純い外模。横撫	範削	内面口辺横施磨き
1-3	C 区	杯	12.6 4.9	1/4	密。雲母	橙	外模。横撫	範削	乳歯状痕
1-4	No. 3	杯	11.9 5.1	4/5	砂粒多い	橙	外模。横撫	範削	乳歯状痕
1-5	No. 5	杯	13.1 4.8	1/3	密。雲母	橙	外模。横撫	範削	乳歯状痕
1-6	No. 1	杯	11.6 (7.1)	1/5	密。雲母	橙	外模。横撫	範削	内墨処理
1-7	C 区	杯	(14.4) (5.0)	4/5	密。雲母	橙	外模。横撫	範削	乳歯状痕
1-8	C 区	杯	岡上復元	10cm	密	浅黄	外模。短かく内傾	範削	
3-1	No. 1	長甕	38.5 18.0	3/4	砂粒	にぶい黄橙	口邊短かく外反	範削	
3-2	鹿島土	杯	岡上復元	15cm	砂粒	浅黄橙	口邊に二条沈線	範削	適用材に転用

註) 遺物の呼称は、実測図の右下に表示し、住居名-№(例1-1)の順とした。登録番号のC区は住居並を4分割し、北西より逆時計回りにA~D区としてとりあげを行った呼び方である。

VII まとめ

今回の調査で検出された遺構は古墳時代後期鬼高II式期の住居址3軒と縄文時代の土坑1基で

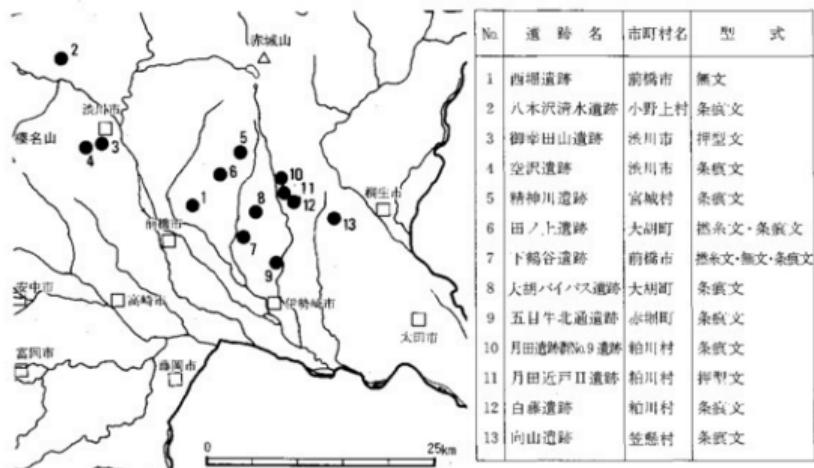


fig.11 結晶片岩を入れる縄文早期土器出土地

あった。遺物は住居址に伴う土器類のほか土玉、赤色顔料等が出土した。縄文時代の遺物は早期と前期中葉の土器、石器が出土した。以上の成果をもとに時代毎の検討を行いまとめとしたい。

縄文時代 出土した土器のうち fig. 9-2・3 は鵜ヶ島台式土器と考えられる。また 10~12 の縄文施主の土器は半節斜行縄文 R L がみられることや縄の節の特徴から諸磯 a 式土器の地文部片といえる。この他に無文土器が 10 片出土しており、大粒の砂粒を混入する特徴を有する。砂粒の中には結晶片岩粒が多数観察できた。結晶片岩は多野山地に産出し、旧石器、縄文時代の石器や石製品として広汎に用いられた石材である。県内では多野のほかに北毛の限られた地域に少量産出するが、堅固で割がれにくいため多野のものと明らかに異なり、石材として利用されたもの認められていない。^{註3} 今回出土した結晶片岩を胎土に含有する土器は現在の所、縄文時代早期の土器に特徴的に認められる。本遺跡の立地する赤城南麓を中心とした地域で 13 遺跡が数えられる。いずれも早期後半の土器に認められる。結晶片岩の産出しない地域の土器にも^{註5} 混入がみられることや、県内全域に分布する該期土器の胎土に存在することが予想されるため、意図的に混和材として使用していることが考えられる。現在のところ撚糸文終末段階から条痕文の時期までに限定されそうである。

今後縄文早期文化の動態を探る上で結晶片岩の供給ルートという交易圈の存在は看過できない事象といえる。

古墳時代 本遺跡が所在する地域は、市内

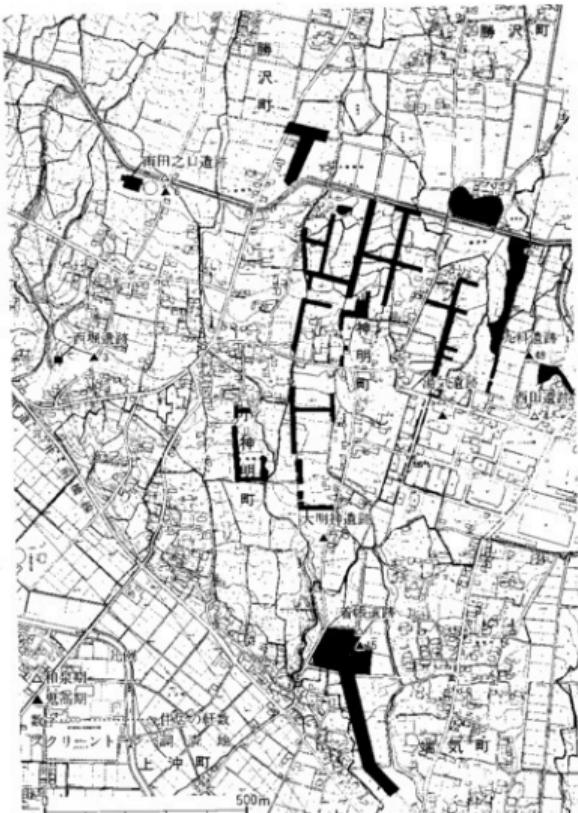


fig.12 西堀遺跡周辺の和泉・鬼高期の調査例

でも荒砥地区に次いで面的な調査が進んでいる所である。芳賀団地遺跡群をはじめとして小神明
計⁶遺跡群、端気遺跡群、南田之口遺跡等の調査があげられる。現在まで市内の調査遺跡で5~6
世紀代の集落が検出されている地域は本遺跡周辺を始めとする赤城南麓に集中している。本地域
は赤城南麓特有地形の南下する河川により開拓された細長い台地が形成されている。この台地上
に集落が展開されており、南の広瀬川低地帯に耕作地が広がっていたものと考えられている。

fig.12の西田遺跡からは和泉期の住居が4軒、着帳遺跡でも1軒検出されている。両遺跡とも炉を使用する住居で、続く湯気遺跡、南田之口遺跡では竈を導入している。鬼高期の集落は九
料遺跡が48軒と軒数が多い。これらの集落は内側口縁丸底の杯と須恵器模倣の外縁を有する杯の
出現段階であり、鬼高I期初段階に位置づけられる。これに継続する時期に着帳遺跡が該当し、
南田之口遺跡、大明神遺跡へと続く。今回検出された住居址3軒も南田之口遺跡等と平行する時
期とされ、埋土にFP層堆積をみるとことにより、FP降下以前に廃棄された住居である。近年、
FPの降下年代については須恵器の年代観の援用により6世紀中葉においていることから、本住
居址はそれよりやや古い年代が考えられる。この後の集落は九料遺跡や小神明遺跡群Iで検出さ
れている。これ以降は芳賀東部遺跡で500軒近い8~9世紀の住居、芳賀北部遺跡で240軒の平安
時代を中心とする住居が検出されている。芳賀団地遺跡群の集落は5~6世紀のものを欠落して
いる。そこで諸遺跡の集落と芳賀団地遺跡群の集落を構成すると一連の流れをとらえることがで
きる。今後こういった展望をもとに集落変遷から地域史の精密な復元が可能と考えられる。その
ために本遺跡のような点にすぎない調査の集積が不可欠といえよう。

註

- 前原照子ほか1985『柳久保遺跡群I』 前橋市埋蔵文化財発掘調査団の中で、この種の石器が様々に呼称さ
れているため、「片刃形の石器」と暫定的に呼称した用法に従がう。
- 住居址内の赤色顔料の検出例は、木暮 誠1984『湯気遺跡群II』前橋市埋蔵文化財発掘調査団の報文中に
ある。H-5号住居址例であり、本住居に比べ量的にも多い。
- 中東耕志・飯島静男1984『群馬県における旧石器・縄文時代の石器石材』群馬県立歴史博物館年報第5号に
よる。「多野山地」と呼んでいる地域は下仁田町付近から、雄川、船川の上流域を経て三波川、鬼石町付近に
およんで、その南西の埼玉北部までの区域を指す。
- 八木沢清水遺跡例については能登 錬氏・石坂 紫氏の御教示による。また浜川市内遺跡例については大堀
昌彦氏・柏川村内遺跡例については小島純一氏、大胡町については山下康信氏、赤堀村については松村一昭
氏の御好意で実見させていただいた。
- 安孫子昭二1967『多摩ニュータウン遺跡調査報告IV』多摩ニュータウン遺跡調査会、安孫子昭二1983『東京
都町田市小山田遺跡群II』小山田遺跡調査会において子母口式土器に片岩が認められている。
- 前原照子・井野修二・桑原 昭1983~1987『小神明遺跡群I~V』前橋市教育委員会。松村義樹、木暮 誠
1983・1984『湯気遺跡群I・II』前橋市教育委員会。木暮 誠ほか1985『南田之口遺跡』前橋市埋蔵文化財
発掘調査団。前原照子1985・1986『芳賀の古代集落I・II』『文化財調査報告書第15、16号』前橋市教育委員会。
唐澤保之1984『芳賀団地遺跡群第1巻』前橋市教育委員会。中澤裕裕・杉浦つや子1982『松峯遺跡』前
橋市教育委員会。

調査要項

遺跡名称 西堀遺跡（にしほりいせき）
遺跡所在地 群馬県前橋市上郷町字西堀264
遺跡記号 61B 5
調査期日 表面調査 昭和61年11月22日
立ち合い調査 昭和62年1月12日
発掘調査 昭和62年1月13日
～1月19日
調査面積 約144m²
開発面積 約144m²
調査原因 民間開発（東京電力送電線鉄塔建設）
調査依頼者 前橋市本町一丁目8-16 東京電力株式会社
群馬支店長 井出和彦
調査主体者 群馬県前橋市教育委員会 教育長 向本信正
事務局 教育次長 奈良三郎（昭和61年12月31日退任）
開口和雄（昭和62年1月1日就任）
社会教育課長 米倉 忍
社会教育課長補佐 中嶋隆二
文化財保護係長 福田紀雄
主任 清田博一 主事 中野 覚
調査担当者 高橋正男 前原 豊
調査参加者 石闇茂男 本多勝太郎 鶴来行子 大澤幸子
三森きくみ 三森八重子 鈴木勝子 中澤不二
相田昌子 横塚昌子
調査協力 東京電力株式会社 共和建設株式会社

西堀遺跡（61B 5）

印刷 昭和62年3月20日
発行 昭和62年3月31日
発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1
印刷所 ほおづき書籍株式会社



